



TITLE:

<批評・紹介>川勝守著 明清江南農業經濟史研究

AUTHOR(S):

松田, 吉郎

CITATION:

松田, 吉郎. <批評・紹介>川勝守著 明清江南農業經濟史研究. 東洋史研究 1994, 52(4): 683-688

ISSUE DATE:

1994-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154466>

RIGHT:

批評・紹介

川勝 守著

明清江南農業經濟史研究

松田吉郎

川勝氏の近著は明清時代の江南地域における農業經濟史を主題としたものである。まずは目次から掲げよう。

まえがき

序章 明清江南農業經濟史の問題點

第一章 十六—十八世紀中國における稻の種類、品種の特性とその地域性

第二章 長江沿岸地域の「春花」栽培

第三章 長江デルタにおける棉作と水利

第四章 荒政と長江デルタ社會

第五章 清代江南の麥租慣行

第六章 十九世紀初頭における江南地主經營の一素材—九州大學所藏『嘉慶租簿』について—

第七章 十九世紀、蔡經畬堂所有地の小作關係—京都大學人文科學研究所藏『租簿』『入版』『租數』について—

第八章 清末、江南における租棧・業戶・佃戶關係—九州大學所藏江蘇省吳縣長洲縣馮林一棧關係簿冊について—

結論（要約）
あとがき

以下、川勝氏の著書の論點を整理し、評者の氣づいた點に即して論評を加えることをお許し頂きたい。

序章 明清江南農業經濟史の問題點

本章において、川勝氏は「宋以前の中國農業史の發展史に比較して、明清農業史のそれはいまだ發展の契機の把握に成功していない。」（六頁）との研究史上の現状認識を下され、また、「合衆國學者のD・H・バーキンス教授は明清農業の技術的發展について、……農耕技術のいかなる顯著な改造もわずかなものであった」（六～七頁）という論や「十八世紀以來の中國は「發展なき成長」というのがエルヴィン教授の判斷」（九頁）に對して、「十六・七世紀と十八世紀における農業經濟に關係した種々の「技術」の發達は、やはりさまざまな形態のものを理解する必要がある」（九頁）。また、「江南農業においてこそ商品作物の作附等々が所有地の零細な、貧しい農民に一般的であつたことが知られるのである。この點についてそれを十六—十九世紀の明清期の歴史的展開に即して理解しよう」（一〇頁）と問題提起された。

そして、「江南」地域の農業史」というのは、「數多くある中國各地の諸地域の一つとしての江南の農業經濟問題であるのではない。明清期、江南農業經濟は中國全體の中でいかなる位置を占めるか」、「江南地域を核として全國の農業經濟はいかにシステム化されていったか」（一三頁）という構想の中で江南を位置づけるべきであると考えられている。

このような構想のもと、本論の構成は「第一—五章は明・清時代の農業「技術」内容とその水準」の考察、「第六—八章は清末、十九世紀の地主制構造」（一二頁）の考察となっている。

第一章 十六—十八世紀中國における稻の種類、品種の特性とその地域性

本章において、華中・華南地域の稻の種類、品種の特性とその地域性について考察された。

その考察によると、「十六、七世紀の明末の段階でその（稻の種類などの）傾向はほぼ出盡くしており」、また、「十七世紀までに確立する中國稻作の一般的傾向とは、長江下流デルタのみに粳米栽培の傳統が残り、他は大體占・秈が優勢であったこと、酒米用の糯米が數多く、かつ全國的に共通する品種が多くみられたこと等」（九七頁）であり、これら「品種の派生とその相互間における特性の認識は、當時稻作が市場向けの商品作物・經濟作物として認識されていたことを示すもの」（九七頁）であった。また、「より早熟な、より早期に收穫され、さらに収量の多い種が開發されていたこと」、「他地方から傳來した種の多いこと」、「二期作用や、鹽分の強い土壤等、さらに濕地用などそれぞれの地宜に合った種が開發されていた」（九七頁）と述べられている。

第二章 長江沿岸地域の「春花」栽培

從來、「中國封建經濟の重要な特徴は、農業と家内手工業の相結合した自給自足の自然經濟様式にあるとする理解があった」が、これは「一面正しく、一面で誤っている」。即ち、「自然經濟の條件下においても、農民はただ自己が消費需要する農産物を生産するだけでなく、他人の手工業原料物品を生産することがむしろ多くを占

めた」（一〇二頁）。この手工業原料物品の一つが、十七世紀前葉の明極末期、長江デルタ地帯の一隅に出現する「春花」とよぶ用語と関連していたと言われる。そして、「春花とは麥、豆、油菜の裏作物全體を指すばあいが多い。もちろんその語義は黃花すなわち油菜（なたね）に由來するところから、春花が油菜だけを指すこともある」（一〇二頁）と言われる。

「春花の諸作物、麥、豆、油菜等の作物は、①春熟（裏作）用の重要食用作物であること、②肥料用作物にもなること、③豚や鴨鵝・鶏などの飼料用作物にもなっていたこと、等の性質がある。さらに重要な點としては、春花作物は表作の米の價格とたいへん密接な關係を有し、その際青黄不接時の食料くい繼ぎ用であるとともに、穀物價格（米價）安定・調整的機能も有していた」（一一六一—一七頁）。また、「十六—十八世紀、長江流域各省の兩熟性（二毛作）農業の發展」は、「特に油菜の普及擴大が重要」であり、それは「春花」の名詞の出現、長江下流デルタから中流江西・湖廣地方さらに四川や雲南・貴州地方までその名詞の擴大と關連している（一四八頁）。この「春花」という名詞の展開は、「極めて密度の高い集約農業の展開」を示している（一四九頁）と述べられている。

第三章 長江デルタにおける棉作と水利

西嶋定生氏が「棉作經營の成立によって變革された農業構造の本質は、結果としてその農業經營において直接生産者が主體性を獲得したことはなくて、商業資本への隸屬と、それを利用した大土地所有者の利潤獲得によって特徴づけられるものであった」（一六四頁）とされる論點について、川勝氏はその基本點を認めながら

も、「第一は、……農家の營農意欲、農民的智恵の發揮こそまず認めるべき」である（一八四頁）。「その二、……落穂拾い慣行の如き、「捉落花」という慣行が棉作田にあったことを傳える。これも貧農等の生活のための一助となったことと思うとともに、何らかの共同體的關係のあつたこと」、「最後に三點目は、……棉花の作柄不況が農民蜂起を引き起こした」（一八五頁）と述べられている。

また、棉作と水利との關係については、従来の「木棉栽培に水利灌漑は全く必要がないという理解はなりたたない」（一七六頁）。

そして、「木棉栽培が農田水利に何らかの障害をおこすもの」（一七六頁）として従来紹介されてきたが、この點に關しては、「水利荒廢は、クリーク中の無主の自然地を不法に占有し、自己の墾地としている江濱大戸及び縉紳の家の一種の造田・新田事業によるのであつて、棉作の展開そのものによるのではない」（一七七頁）と述べられている。この問題は「明末以降鄉紳の土地所有の展開に伴い、鄉紳の特權たる優免特權とかかわつて、花分詭寄の不正が増長し、徭役負擔が零細土地所有者へ下降した」と關連しており、「明末江南の水利は極めて困難な狀況となつていた」（一八三頁）と述べられている。また、「棉作は明確に小作農民たる佃戸層によつて擔われており、それに對して地主層は、對佃戸の佃租徵收關係において、また國家收取『白糧・漕糧等の稅糧徵收との關わりにおいて、棉作から水稻作へ再轉換することを願うのであつた』が、「かかる地主側の意圖は……短期的には實現不可能だつた」（一八三頁）と述べられている。

棉作を行う佃戸層の實態を明確にされ、彼らの營農意欲、共同體的關係を明らかにされた點は興味深い指摘であつた。ただ、造田・

新田事業を行つて水利荒廢をもたらし、花分詭寄によつて脱稅する「江濱大戸及び縉紳の家」と佃戸へ棉作から水稻作への再轉換を願う地主層との關係について、それらの相互關係、相違點に對する言及が欲しかったと考える。

第四章 荒政と長江デルタ社會

「荒政とは凶作に對處するための政策をいつた」（一九一頁）が、明末長江デルタ社會では平糶が重視された。「そのこの意味は、平糶であれば有償、購米者の方は銀錢を持っている。その銀錢は棉花・桑葉また、豆や瓜菜などの商品作物・經濟作物の栽培によつて入手したもののか、さもなければ生絲・絹織物、棉糸・棉織物など手工業等の商品生産によつて所得したものである。さらにまた、地方州縣の土木事業や江南市鎮城市での商工業への出稼、官戸鄉紳家への雇傭によつて、種々の勞働の對價であつたりもした」（二二〇頁）と言われる。即ち、「單なる生活困窮ではなく、非農業勞働によつた銀錢は所有するが、米穀糧食そのものを缺くといった飢餓であつた」（四八八頁）。

また、平糶には「各種商人と官・政府との調整が課題」（四八八頁）であり、特に、「徽州商人・新安商人」に十分な對策を練る必要があつた（二一五頁）と述べられている。

そして、平糶をとりまく米の需給については、當時、「四川・湖廣・江西と長江下流、さらに福建、廣西と廣東、臺灣と福建等々といった全中國の米數流通・需給關係」（二二四頁）が成立していたが、いわゆる「湖廣熟、天下足」の意義は「商品生産の展開の著しい長江デルタ社會あつての「湖廣」であることを銘記すべきである」（二二四頁）と述べられている。

第五章 清代江南の麥租慣行

「明清時代、長江デルタにおける麥租慣行の存在は天野元之助氏の發言もあつて極めて否定的ではあるが」(二三九頁)、その制度を傳える史料に、乾隆『崇明縣志』卷四、賦役志、田制の「買價承價說」史料等があつた。その「買價承價說」によると、「買價承價は一般的には田面田底兩權利であり、そこには一つの土地の上に成立する重層的關係、もしくは用役權の關係が存在する。……圩岸築造費用を自己負擔した所有權者のばあいには買價とし、圩岸築造を佃戸にまかしたばあいに、その佃戸の權利を承價とするよう」で、また「買價のみ麥租があり、承價にはそれがない」ということは、税糧に夏稅秋糧の區別があるにも對應し、買價は糧を辨じ、承價は糧無しということにも關連するの、あるいは「麥の收は薄いので二重の負擔などに耐えぬ」(二四九頁)からかもしれないと述べられている。

以上の史料等から「長江デルタ各地方には麥租慣行が根強い。屢々紛争・裁判事件の種になった。それは麥租が地主・佃戸間のせめぎ合いの中に設定された收取の體系」である(二五三頁)と述べられている。

第六章 十九世紀初頭における江南地主經營の一素材―九州大學

所藏『嘉慶租簿』について―

「租簿・租冊等の地主文書の紹介や分析」は村松祐次氏や夏井春喜氏によって行われている。しかし、兩者の「研究が分析の對象とした史料は全部、太平天國時期以降に作成されたものばかりである」(二五七―八頁)。川勝氏が本章で分析對象とされた九州大學所藏『嘉慶租簿』や次章以下で取り扱われた京都大學人文科學研究

所藏『租簿』、東京大學東洋文化研究所藏、舊仁井田陞博士輯集の土地文書には「いずれも太平天國期、アヘン戰爭時よりも先の時期に成立した文書が存在」(二五八頁)しており、これら三文書は「原は同一の地域の、文書作成者の手によるものであった」(二五八頁)。

『嘉慶租簿』にみえる金匱陳姓地主の地主制、地主佃戸關係は「契約書(佃契)の文言と租簿の記載との間には差異がある。」(四九一頁)

たとえば、「岸本美緒氏は、「昨荒稻」とは稻の種類でなく、むしろ「刈る」という行為に關わる語、とした。……缺租した佃戸に對する實力行使の收租としての「捉散稻」が「昨荒稻」の意であろう」(三〇七頁)という點を基本的に承認しつつも、「これを佃農側に同情的にみるか、地主・業主側に同情的にみるかの差はある。筆者はむしろ、強盜か戰爭行為あるいはこそ泥に屬すともいふべき捉散稻行為を選択せざるを得なかった地主・業戸側に同情する。」

(三五二頁)「缺租が續き、納租が悪いと、承佃面積の減少、さらには退佃に追い込まれるケースも多い。ただし、これは契約文書に文言があるからでなく、地主・佃戸關係の中での佃農の現實的選擇であらう。承佃關係にも佃戸間での競争があり、より良佃を地主は選んだ。」即ち、「市場經濟の原理」(三五二頁)である。従つて、「地主と佃農とは對立の面と相互依存の面との兩面の關係である。地主は佃戸の親族關係などさまざまな關係・チャンネルを通して小作關係の安定維持に努めていた」(四九一―九二頁)と述べられている。

契約書(佃契)の文言と租簿の記載との間には差異があり、契約

書の分析にとどまらず、租簿による地主佃戸関係の實態分析を中心に現實の關係が相互の依存・對立と市場經濟原理で成り立っていることを究明されたことは意義がある。

第七章 十九世紀、蔡經畬堂所有地の小作關係―京都大學人文科學研究所藏『租簿』『入厰』『租數』について―

川勝氏は「京都大學人文科學研究所藏の各種『租簿』類は、道光年間三期のほかに、太平天國期の空白を置いて、それ以後の同治―光緒年間と十九世紀後葉までの地主―佃戸の收租關係を記載してあるので、それをも併せて検討し、要するに、アヘン戦争―太平天國期の前後にまたがった十九世紀における中國地主制の實相のいくつかの個別面を描出」（三七七頁）された。

その結果、蔡經畬堂所有地の小作關係については「アヘン戦争、太平天國という激動の時代をくぐった割には小作地の繼承性が安定して」おり、また、「その小作關係の佃戸名をみても、さすがに三、四〇年の時間の経過は一代を超えるものだけに交替がみられるのは當然であるが、それらが多く同姓―恐らくは父子、兄弟等の親族關係間における繼承が壓倒的であることも確認しておくべきことであろう」（二八四頁）と述べられている。また、「注目すべきことは、六〇％、七〇％の納入でも「清訖」と簿冊上、決済されていることであろう。十九世紀に減賦減租論の議論は喧しい。しかし、その基礎には各租簿にみた收租狀況があるのである」（四〇二頁）と述べられている。即ち、減賦減租論の背景には地主佃戸間の現實の納租狀況が反映していると指摘された。單なる階級對立の問題として把握するのではなく、現實の地主佃戸關係の收租をめぐる實態分析から、當時の減賦減租論の背景を考察されたことに意義がある。

第八章 清末、江南における租棧・業戸・佃戸關係―九州大學所藏江蘇省吳縣長洲縣馮林一棧關係簿冊について―

九州大學所藏江蘇省吳縣長洲縣馮林一棧關係簿冊は「村松（祐次）氏が使用した東洋文庫所藏本と密接な關係を持つものである」（四〇七頁）が、ただ、九州大學所藏のものには「佃冊」「租簿」が入っている点」（四〇七頁）に特徴があると言われる。

この九州大學所藏本の分析によって多くのことを明らかにされたが、特徴的な點を掲げさせて頂くと、例えば「力米」というのがあった。「力米」という事實上の佃租の附加があつて、それは、大率佃租一石に對し三〜四升程度である。その結果、佃租の總額は、中にはそれでも減免されているばあいもあるが、むしろ増加傾向にあつたといふべきであろう。この點から、この力米の定着化は、當時佃戸の抗租によつて、あるいは他の自然的要因によつて、佃租が割引かれ、デフロートの状態にあつたという事態に對し、佃租總體を確保するためにとられた方策でもあつたという理解も可能になる」（四七五頁）と述べられている。「力米」という附加的佃租成立の要因を明らかにされたことは意義が深い。

馮氏租棧の性格について、「第一に、……業戸の土地支配は名目的であつた。第二には、……租棧關係地における租棧の佃戸管理は永續的強固なものであつた。第三に吳・長洲兩縣の馮林一棧を構成する吳姓業主地は、……租棧管理の下に入つていた。第四に馮林一棧の關係地は村松氏が確認した面積數などよりはるかに多く、「馮桂芬の没後もその成長をやめない」（四九三頁）という特徴があつた。従つてこの租棧は「いわゆる郷紳的土地所有、包攬と相似たものでありながら、それとは質の違う地主管理機構であることを示

す。それは「企業」とか「特殊法人」とかにむしろ近いもの」(四九三頁)であったと述べられている。

即ち、川勝氏の言う租税とは單純な支配・被支配關係を越えた地主佃戸間の相互對立・依存の關係・經濟的動機關係に特質があったと言われていると考へる。

この點は新しい問題提起として我々は受けとめたい。

最後に、結論部分において、農業技術問題に關して、「十一十三世紀の宋代における農業技術革命……に比し、それほど顯著な技術的發展が明清期にあるわけではない。……明清農業の技術發展の主要な部分はもっと細かい、チマチマしたものだ」。即ち、「裏作・二毛作は「春花」一詞を成立させてその價值を高め、ついには裏作の小作料」麥租が出現した。……十六―十八世紀に急成長する米の全國的流通は行政と商業の見事な合作の上に成り立っていた」と述べられ、土地制度については「國の行政と地主經營の結合の上に成立していた」(四九四頁)と結論づけられた。

明清時期の農業技術上の細かい發展上に國家と地主關係の新たな相互關係の成立という問題提起をされている。明清期の政治經濟構造の微妙なメカニズムを今後とも考察すべき課題として設定されたと考へる。

川勝氏の著書は從來、十分に考察されてこなかった農業技術の詳細な實態を明らかにされ、また契約文書、土地關係文書の記事の表と裏の實態を明らかにされた。そして、國家、地主、佃戸の相互關係を總體化して明らかにされたことに意義があると考へる。今後、同書に觸發されて、明清時代の農業經濟構造の解明がより一層進展せんことを期待したい。

一九九二年三月 東京大學出版會
A五判 X+四九六+三三頁 一二、三六〇圓